

シェイクスピアの「ソネット集」と薔薇

中 村 六 男

John Bartlett の *Concordance to Shakespeare* によって数えてみると、薔薇という言葉はシェイクスピアの戯曲の中に70回用いられている。しかし薔薇という言葉だけでなく、musk-rose, sweet brier, dog-rose, canker, damask, eglantine, brier, thorn など薔薇に関係する言葉や心象として薔薇を用いている表現を数えると、その数は非常に多くなる。薔薇に関する言葉は彼の戯曲の中にだけでなく、彼の詩の中にも数多く用いられており、特に彼の「ソネット集」では多く用いられている。

薔薇すなわち英語の rose という言葉の用法は、*A New English Dictionary* や石川林四郎著「英文学に現れたる花の研究」などに詳説されているとおり、複雑多義にわたるのであるが、ここでは極めて簡単にシェイクスピアが用いた意味を Alexander Schmidt の *Shakespeare-Lexicon* によって尋ねることとする。(1)は薔薇の花。(2)は靴飾や耳飾（この場合は実際の薔薇の花も用いられた）の花形に結んだリボン。(3)はランカスター家とヨーク家との両家のバッジ。(4)は花のような容貌を示すものすなわち赤い頬。(5)は若さと美の象徴。(6)はいとしさを表わす呼称。(7)は家の名前。以上7通りに用いられている。「ソネット集」では(1), (4), (5)および(6)の意味が多く用いられている。

しかし7通りの意味に the rose という言葉が用いられているとしても、第1の意味がその根元であって、他の意味はそれから派生した意味である。しからばシェイクスピア時代の薔薇の花とはどんな花であったのだろうか。現在は殆んど世界のいたる処に美しい薔薇が絢爛と咲き誇り、その種類も *Modern Roses VI* によると、その類(classes)が43、その種(正しくは亜種)は1万種を越える程の多数である。しかも殆んどの種類が春の初めから秋の終わりまでつぎつぎに咲く所謂四季咲きの薔薇である。ところがシェイクスピア時代の薔薇は現在の薔薇とは異っていて、Hybrid Tea, Flori-bunda, Grandiflora のような進歩改良された種類に属する美しい現代の薔薇と同一に考えてはならない。また当時の薔薇は年に一度だけ初夏に咲く一季咲きの薔薇⁽¹⁾であった。更に種類としてもシェイクスピアの友人であり、当時の薔薇の専門家⁽²⁾であった John Gerard がその名作 *The Herball or General Historie of Plants* (1597) で述べているように 'the White, the Red, the Provençe or Damask, the Rose without prickles, the Holland or Provençe, the Single and Double Musk-Rose, the Great Musk-Rose, the Velvet, the Yellow, the Double Yellow, the Double and Single Cinnamon' の栽培種が11種、野生薔薇として 'the Eglantine or Sweetbriar, the Double Eglantine, the Briar or Hip-tree, and the Pimpernell or Burnet' の4種であった。以上に挙げられた薔薇の種類を Bertram Park 著の *The World of Roses* や Graham Stuart Thomas 著の *The Old Shrub Roses* を参照して検討すると、The White とは the Alba Rose とともに the 'White Rose' ともいわれた英国に古くからあった半野生の白薔薇で学名 *Rosa alba* であり、the Red とは *Rosa rubra*, *Rosa rubrifolia* 或は *Rosa gallica* ともいわれるフランスから古く英国に伝来した赤薔薇であ

って、Rose of Provins とともに the French Rose ともいわれた。the Provence or Damask とは *Rosa damascena* であって、シェイクスピアが *Wint.* IV, 4, 222 で用いた damask roses でもあり、blush-red colour (紅赤色) の薔薇である。the Rose without prickles とは所謂トゲナシバラで、今日でも台木バラやシラップ種の薔薇に見受けられる。英国の諺に 'No rose without a thorn.' とか 'No roses without prickles.' とか云われ、薔薇には必ず棘があると古くから決っていたが、これは 'No good without pains' とか 'If you lie upon roses when young, you'll lie upon thorns when old.' とかに見られるように苦楽は人生では常に相俤うことを諭す教訓であって、実際には棘のない薔薇は珍しくはない。the Holland or Provence とは *Rosa centifolia* 或は *Rosa provincialis* と云われ、the 'Cabbage Rose' とともに the 'Rose of Provence' ともいう花卉の多い薔薇である。the Single and Double Musk-Rose はシェイクスピアが *MND.* で the sweet musk-roses と用いているがこれは普通の地を這う半蔓性の種類であって、the 'Field Rose' と云われ、学名は *Rosa arvensis* であって、英国の田舎や林間に生える野薔薇の一種であった。今日のジャコウバラ (学名 *Rosa moschata*) とは異ると云われている。一重のものや八重のものがあつた。the Great Musk-Rose は前述の *Rosa moschata* であって芳香のある薔薇である。the Velvet は花卉が赤くピロード状の感じのする薔薇 (*N. E. D.* によると a variety of rose with velvety petals) であって、今日の薔薇ではこのような種類は赤や黒薔薇の系統に極めて多い。the Yellow は *Rosa foeta* 或は *Rosa lutea* で、the 'Austrian Briar' と云われた種類と推定される。the Double Yellow は *Rosa hemisphaeria* で the 'Sulphur Rose' と云われた八重の黄色の薔薇と想像される。the Double and Single Cinnamon は *Rosa cinnamomea* の単弁および復弁の薔薇を云ったのであろう。the Eglantine or Sweetbriar は *Rosa Eglanteria* or *Rosa rubiginosa* という香りのよい赤色単弁の野薔薇を云う。the Double Eglantine は八重の上述の野薔薇である。the Briar or Hip-tree は英国の野山に普通はえる野薔薇で Briar と書き、野薔薇の総称名でもある。the Pimpernell or Burnet は今日は薔薇には入らない。勿論薔薇科の植物には相違ないが、pimpernell は古くは the Great Burnet (学名 *Sanguisorba*) と Salad Burnet (学名 *Poterium Sanguisorba*) とを意味し、ワレモコウを意味した。⁽⁴⁾

以上のように John Gerard は当時の薔薇として14種を挙げているが、シェイクスピアはその作品に 'the dog-rose,' dog briar 或は canker と云う *Rosa canina* をしばしば用い、更に其他の種類も随所に用いている。このことは彼が当時の薔薇の専門家よりも薔薇に関する実際の知識がむしろ多かったことを示すものではなかろうか。現在の薔薇に較べると彼の時代の薔薇は種類も少く、また余り進歩改良を加えられたものではなく、原始的なものに近く、余り華麗なものとは云い得ないかもしれないが、薔薇はやはり花の王者であり、⁽⁵⁾ また女王と見倣され、最高美の象徴でもあつた。

以上述べてきた当時の薔薇がシェイクスピアの「ソネット集」ではどの様に用いられているだろうか。それを述べる前に「ソネット集」でうたわれている若者、即ちシェイクスピアの友でありパトロンであり、またこの「ソネット集」の唯一の生みの親(the only begetter)と述べられている青年を此の論文ではエリザベス朝史の大家である A.L. Rowse に従って Henry Wriothesley, 3rd Earl of Southampton (1573-1624) と仮定しておく。⁽⁶⁾ この Southampton

伯爵は絶世の美少年であって、シェイクスピアは a 'sweet boy,' 'my lovely boy with a woman face,' 'my love' と述べ、その少年を愛し、その美を常に褒め称えている。「ソネット集」は全体で154篇のソネットからなっているが、1番から126番まではこの少年を主としてうたったものである。そのうち1番から17番までは彼に結婚を勧め、その美しさを子供に再生させて永久に残すように訴えたものである。

Sonnet 1で From fairest creatures we desire increase/That thereby beauty's rose might never die, (ll. 1-2) と beauty's rose という言葉を用い、Schmidt の説のように Southampton という最高な美貌の人間を表わす象徴として薔薇を用い、その後 Thou that art now the world's fresh ornament/And only herald to the gaudy spring,/ Within thine own bud buriest the content/And, tender churl, mak'st waste in niggarding. (ll. 9-12) と絢爛と咲き、世を美しく飾る豪華な春を告げるただ一人の使者とも云うべき薔薇の蕾たる君が、結婚をためらって子供を残さないのは、花を咲かせて美しさを発揮せずに、蕾のまま腐って落ちてしまう蕾と同然であると、薔薇栽培者の用語で云うならば、ポーリングと呼ぶ現象を用いている。即ち此処では薔薇の心象 (image) を用いて Southampton を表現しているのであって、薔薇は一種の隠喩 (metaphor) として用いられている。薔薇を美男子に喩えるのは前述のように、王者に喩えられたので、不適とは云えないし、また薔薇は最高美を表わし、命短かきものと見做され、再生 (rebirth or regeneration) の象徴としても用いられていたことは Jean Gordon (*Pageant of the Rose*, pp. 7-8) の説くところである。シェイクスピアが Southampton に結婚を勧め、その美しさを永遠に子孫に伝えることを訴えるこの第一番のソネットでは、薔薇を象徴 (symbol) および心象として用い、薔薇の隠喩によってこの詩の主旨を述べているのは実に巧妙であり、適切であるといわざるを得ない。

Sonnet 2 においては薔薇は詩の表面には用いられていないが、Thy youth's proud livery, so gazed on now,/Will be a tattered weed of small worth held: (ll. 3-4) とか…forty winters shall besiege thy brow/And dig deep trenches in thy beauty's fields, (ll. 1-2) という言葉からわかるように、万人注目の豪華な薔薇も冬ともなれば花盛りも過ぎて掘り返された畝間に枯れ果てて、淋しく立つ枝に醜くこびり着く薔薇の花の心象を基調とした隠喩によって、今は眉目秀麗な Southampton も冬を40回も過すと老木と化して枯れ果てるのであるから、男盛りの過ぎない間に結婚してその美しさを子供に伝え、宝の持ち腐れとならないように善用せよと訴えるのである。このソネットでは薔薇の命の短いことを利用しているのである。

Sonnet 5 もまた薔薇の心象を用いて Southampton に結婚を勧めている。美しい人が時の破壊力によってやがて老いて死ぬけれども、その人に子供があれば、その人の美しい本質が受け継がれて、なおも美しさは生き続けるのだと、薔薇と rose-water との隠喩を用いてうたっている。まず最初の4行 (quatrain) で、Those hours that with gentle work did frame/The lovely gaze where every eye doth dwell/Will play the tyrants to the very same/And that unfair which fairly doth excel: と時は万人注視する美しい物を優れた技巧で創造するが、時はまたやがてその美しい物に暴虐を働き、その美しさを奪い去ると、時の破壊作用について述べる。次の四行 (quatrain) では時の破壊作用の有様を、For never-resting time leads summer on/To hideous winter and confounds him there;

／Sap checked with frost and lusty leaves quite gone,／Beauty o'ersnowed and bareness everywhere. と述べ、時は止まらず、夏は醜い冬へと進み、時は美しい物を其処で破壊する。樹液は霜でとぎされ、繁った葉は全て散り果て、美しきものは雪で蔽われ、至る処荒涼となるとうたう。次の四行 (quatrain) で、Then, were not summer's distillation left,／A liquid prisoner pent in walls of glass,／Beauty's effect with beauty were bereft,／Nor it, nor no remembrance what it was. と、夏を蒸溜した本質、即ちガラス瓶に閉じこめられた液体が残されていないならば、美の作り出したものは美とともに奪い去られ、在りし日の美を思い偲ぶよすががなくなるであろうとうたう。しかし最後の対句 (couplet) で、But flowers distilled, though they with winter meet,／Lose but their show; their substance still lives sweet. と花が蒸溜されておれば、冬になっても、唯美しい姿が失われるだけであって、花の本質である香りは芳しく生き続けるとうたっている。即ち Southampton が結婚するのは薔薇の花を蒸溜して香水を取るのと同じであると、隠喩を使って結婚を勧めているのである。シェイクスピアが summer's distillation とか a liquid prisoner pent in walls of glass とかという言葉を用いておるが、これらは Sidney's *Arcadia* から取ったものと云われ、瓶に入った rose-water を云うのである。rose-water とは薔薇の花を蒸溜して作る薔薇の香水であって、attar とおとも otto とおとも云われ、当時は非常に貴重なものとされのである。シェイクスピアは薔薇の花の美しさは外観の美しさであり、よき香のエキスである attar を薔薇の本質 (substance) であると見做した。そして人間の姿の美しさを心の善さにしばしば対立させ比較している。彼にとっては香りのない薔薇や臭いの悪い薔薇は心なき人間か心悪しき人間と同然であった。

Sonnet 6 は Sonnet 5 の一種の antiphon (応答頌歌) であって、薔薇の心象 (rose-water の心象も含む) を用いていることは当然である。冬が来て君の美が自滅しないうちに、薔薇の花を蒸溜して rose-water を取るように、君の美の本質 (substance) を蒸溜して瓶に入れ、君の美をもってある処を宝庫とし、君のような美しい人間を幾人も子供として世の中に残し、それによって死にうち勝って、子孫の中に君は永遠に生きるようにせよとうたっている。rose-water はただ香水として用いられたばかりでなく、当時は薬用としても使われたのである。また前にも述べたように薔薇は rebirth や resurrection の象徴としても用いられていたので、薔薇の隠喩によって人間が結婚によって永遠の生命を子孫に得るやうにとうたうことは極めて適切であると云わざるを得ない。

Sonnet 14では Thy end is truth's and beauty's doom and date. (l. 14) と云って、Southampton が結婚せずに子供がなくて死ぬならば truth と beauty は彼と共に終焉し、もし彼が結婚によって永遠の生命を得るならば truth and beauty shall together thrive, (l. 11) とうたっている。其故に Southampton は真と美の権化とも見做され、彼を表現するに薔薇の隠喩を用いているので、彼の beauty は薔薇の花の美しさ、彼の truth は薔薇の香りに相当することになる。シェイクスピアは薔薇の香りを人間の真実さと同様に尊んだのである。

Sonnet 15では…every thing that grows／Holds in perfection but a little moment (ll. 1-2) と、成長するものが最も完全になった状態を維持するのはほんの瞬時であると述べ、植物のように人間も成長しきると、やがて衰え死んで、忘れられるものだと説いている。そして I engraft you new. (l. 14) と、当時ようやく行われるようになってきた薔薇

などの増殖法としての接木の心象を用い、Southampton を彼の詩に新たに接穂してうたい、不滅の生命を得させるのだと云っている。即ち花の命の短きことと接木とが隠喩として用いられている。

しかし Sonnet 16で、And many maiden gardens, yet unset, / With virtuous wish would bear your living flowers, / Much liker than your painted counterfeit: (ll. 6-8) と、my barren rhyme (l. 4) や painted counterfeit (=portrait) よりももっと生き写しの子供を結婚という more blessed means (l. 4) によって得た方が永遠の生命を得るにはよろしいと説いている。子供は your living flowers と花の心象によって表現している。

Sonnet 17では Sonnets は君の真価を十分に詩にうたうことはできないが、よしんば君の美しさを十分にうたい込むことができたとしても、将来の人々は唯々詩人の空想と思うだろう。その時に君の美しい子孫が居れば、詩と君の子孫との両者に君は生きておって、二倍の不滅性を持つことになるかと説くのである。それは恰度麗わしい薔薇が現実には咲いており、薔薇を称える詩歌や絵画があってこそ薔薇は一層その生命を保っているのと同様である。

以上1番から17番までの Southampton に結婚をして彼の美を子孫に再生するようにと訴える詩には非常に多く薔薇が用いられている。それはそうした詩のテーマが薔薇の持つ文学的伝統上の特性や実際の花としての特性をもって表わすのに最も適しているからであろう。

さて次に Sonnet 18は今までのソネットとは調子を変えて、シェイクスピアが彼の詩の不滅性にたいする自信を示し、五月の薔（美しい薔薇など）は嵐にゆさぶられ、やがて美しいものはすべてその美しさを失うが、この永遠の詩 (in eternal lines, l. 12) で、美しい夏の日 (a summer's day, l. 1) とも云うべき君がうたわれるならば、君の永遠の夏 (the eternal summer) は色褪せることなく、たとえ君が死んでも、人類のあらんかぎり生命が与えられるのだと唱っている。

Sonnet 19では Devouring Time (l. 1) はあらゆる動物に害をなし、swift-footed Time (l. 6) は季節を変え、世のうつろいゆく美しい物 (all her fading sweets, l. 17) のすべてを気儘に支配する。が時よ、我が愛する人を、後世の人々に美の原型として (For beauty's pattern to succeeding men, l. 12) 無傷のままにしておいてくれと願う。しかし old Time がひどく害を与えても、我が愛する Southampton は我が詩の中で永遠に若く生きるだろうとうたっている。Time という言葉は1番から126番までの Southampton についてうたったソネットでは78回用いられているが、the dark lady に関して歌ったソネットでは一回も用いられていない。それは薔薇が Southampton に関するソネットでは非常に多く用いられているが、the dark lady に関するソネットでは、彼女には薔薇の美しさが全然ないと歌う 130番を除いて、全然用いられていないのと同様である。即ち time はシェイクスピアの愛する美しい薔薇と Southampton との不死性とは敵対関係を常に持つので非常に関係の深いことを示しているのである。

Sonnet 25では薔薇でなく金盞花 (marigold) の明喩 (simile) が用いられており、それは幸運に恵まれて公の栄誉や称号に誇っている人たちを喩え、これら王侯の寵愛を受けている羽振りのいい人たちは一度墮落を買って彼等の誇りも栄光も死滅してしまう。それは金盞花が太陽の光に照されている時だけ花卉 (leaves, l. 5) を誇らしく開いているが、曇って太陽があたらなくなると凋んでしまうのと同じである。ところがシェイクスピアは

Southampton を愛した彼から愛されて、変ることなく、捨てられることもないので幸福であるとうたっている。そして今まで薔薇の心象や隠喩を用いて表現されてきた Southampton は Sonnet 33や34では太陽の心象で表現され、薔薇の隠喩から太陽の隠喩を用いて表現されるように変るのである。

しかしながら最高美を表わす薔薇も太陽も常に美しく輝やかしいとは限らない。それぞれはまた欠点・弱点 (drawback) を持つこともある。Sonnet 35で *Roses have thorns, and silver fountains mud; / Clouds and eclipses stain both moon and sun, / And loathsome canker lives in sweetest bud.* (35. ll. 2-4) と、シェイクスピアが旅に出ている間に、薔薇でもあり、太陽でもあった Southampton が彼の情婦 (mistress) であった the dark lady を奪うという過ちを犯したことをうたっている。彼にとっては薔薇のトゲは薔薇の欠点であり、最も美しい薔薇の蕾を食い荒らす canker-worm (ジャクトリ虫やその他の青虫の類で蕾の芯をごっそり食い荒らす芯食虫を云う) は薔薇の欠点であったのだ。それは太陽に対する雲や日食と同じである。そして Southampton の過ちを彼は愛と憎しみの葛藤のうちに恕している。

Sonnet 52では Southampton は宝箱や to make some special instant special blest (l. 10) (たまに見るすばらしい瞬間を特に祝福されたものにする) 衣裳をしましう単箭に譬えられている。

Sonnet 54は最もよくシェイクスピアの人間、薔薇、詩、および美にたいする考えを表わしていると思われる。その意味でこの sonnet の全体を挙げておく。

O, how much more doth beauty beauteous seem
 By that sweet ornament which truth doth give!
 The rose looks fair, but fairer we it deem
 For that sweet odour which doth in it live.
 The canker-blooms have full as deep a dye
 As the perfumèd tincture of the roses,
 Hang on such thorns, and play as wantonly
 When summer's breath their maskèd buds discloses:
 But, for their virtue only is their show,
 They live unwooed and unrespected fade,
 Die to themselves. Sweet roses do not so:
 Of their sweet deaths are sweetest odours made:
 And so of you, beauteous and lovely youth,
 When that shall fade, my verse distils your truth.

美は真実があってこそ最高の美を発揮する、換言すれば、外貌 (appearance) と本体 (substance, reality) とが合致している場合に最高美が出現する。ただ表面的な見せかけだけの美しさでは価値がない。若さによる姿の美しさはやがて年老いて消え去り、人間は死滅する。しかし真実な人間はその本質である真実があるのだから、彼の詩は Southampton の真実を蒸溜して永久不滅にするのである。それは香りよき薔薇の場合と同様である。薔薇は

美と真実との合体したものである。薔薇が本当に薔薇である所以は香りである。唯々恰好だけが美しくとも香りの無い薔薇である *canker-bloom* (*dog-rose* で学名は *Rosa canina* であって, *scentless wild roses* で *dog briars* と云われる) は, 形こそは薔薇に似ているが真正の薔薇ではない。それ故に誰にも相手にされず独り散り去る無価値なものである。本当の薔薇の本質は香りであって, たとえ花は散っても, その香りは蒸溜されて *attar* となって永久に香りを残すのであると唱っている。

Sonnet 65では, 美は世の中の万物を破壊させる時 (*battering days*, l. 6, *Time*, l. 7, l. 10) に屈し, 悲しい必滅性 (*sad mortality*, l. 2) に支配されねばならぬ, 美の力は命短い花の力よりも強くないのだからである。それ故に時のもっとも貴い宝石 (*Time's best jewel*, l. 10) ともいうべき美を時の暗い箱 (*Time's dark chest*, l. 10=*the dark coffin or grave*) ともいうべき死滅 (*mortality*) から隠しておくことができない。ただ我が愛の常に輝くこの詩にはかなき君の美を永遠に留むる奇蹟あるのみとうたっている。人の美は花の美と同様に時の支配を受けて必ず滅する命の短いはかないものである。それに不滅性・永久性を与えるのは詩であるとシェイクスピアは確信を持つようになったのである。

Sonnet 67では *Why should false painting imitate his cheek, / And steal dead seeing of his living hue? / Why should poor beauty indirectly seek / Roses of shadow, since his rose is true?* (ll. 5-8) とあり, *dead seeing* とは *lifeless appearance* であり, *roses of shadow* とは *painted roses* であり, *indirectly seek* とは *imitate* することであり, *his rose is true* とは *his rose is natural* である。Southampton こそは自然の真正の薔薇で最高な美である。ところが世の連中は悪化腐敗して, なぜに美しくもない者共 (*poor beauty*) が顔に偽りの化粧をして彼の美容を真似たり, 画にかいた本物でない薔薇の模倣をするのか。自然の誇りうる美しいものは Southampton だけであって, 自然は彼の豊かな美に生き, 今の虚偽の時代よりもずっと昔に自然が偉大な財宝を持っていたことを示すために彼を貯蔵しているのだとうたっている。このソネットでは Southampton こそは真の薔薇であり, 他の連中は影の薔薇 (*roses of shadow*) であるとうたっている。

Sonnet 68では花は生きかつ死するものである。そのように本当の美が昔は生きかつ死んでいったのであった。その昔の頃の美の原型 (*the pattern of beauty*) が Southampton の容貌である。今の連中の美は皆虚偽であり, 借り物の美であると唱っている。

Sonnet 69では, 外面的な美しさは外面的な讃辞を博するが, やはり心の美しさ (*the beauty of thy mind*, l. 9) がなければならぬ。心の美しさは花の香り (*odour*) であって, それがあってこそ花は本当に美しいのである。心の美しさは君の行為によって世人が忖度する。そして俗人たちは表面では微笑しつつも, 君の美しい花に雑草の悪臭を加えている (*To thy fair flower add the rank smell of weeds*, l. 12)。君の外面的な美しさに何故に君の香りは釣合っていないのか。それは君が俗衆と交っているからである, とシェイクスピアは Southampton に注意と警告を与えている。そして此の詩で美しい花とよき香りとの関係は人間の外貌の美しさと精神の美しさとの関係に等しいとしている。

Sonnet 70では, *So thou be good, slander doth but approve / Thy worth the greater, being wooed of time; / For canker-vice the sweetest buds doth love, / And thou present'st pure unstained prime* (ll. 5-8) とあり, 君が善良である限りは, 悪口を云われてもそれは, 世人から慕われていて, それだけ君の価値が大きいことを立証するに過

ぎない。というのは canker-vice は一番美しい薔薇の蕾を好む、そのように悪口は純粋な汚れない人生の花盛りを示している君を好んで害するからである、とうたっている。Sonnet 35にも出てきた言葉であるが canker という語はシェイクスピアでは三通りに使われている。(1) eating, spreading sore or ulcer とか a corroding evil の意味で、今日の薔薇培栽家の言葉でいうとクラウンゴール菌による stem canker (茎キャンカー) や根を侵す根頭癌腫病などを示す薔薇の病気であって、これが比喩的にも多く用いられている。(2) a worm that destroys buds and leaves で、所謂 canker-worm といわれるもので、蕾の芯を好んで食い荒らすジャクトリ虫の類で、花の芯食い虫である。canker-bit, canker-blossom (=a blossom eaten by a canker) や canker sorrow (=grief preying like a worm) などはこの意味に属す。(3) the dog-rose で、Sonnet 54で述べた canker bloom はこの薔薇で、学名 *Rosa canina* で、香りのない野薔薇であることは既に述べた。このソネットですべて使われている canker-vice は(2)の意味を持ち、vice like a canker 程の意味に使われ、canker-worm は最もよい薔薇の蕾を好んで芯を食い荒らすように、人生の最も美しい咲き初めの汚れなき純正な花たる君を悪口は好んで傷け荒らすのだと云っている。そして sweetest buds と canker の関係を隠喩として the beauty of pure unstained prime と悪口の間接関係を唱っているのである。

Sonnet 94 の sestet に The summer's flower is to summer sweet, / Though to itself it only live and die, / But if that flower with base infection meet, / The basest weed outbraves his dignity: / For sweetest things turn sourest by their deeds, / Lilies that fester smell far worse than weeds. とある。夏の花は自らのためにのみ生き枯れていくが、夏を美しくする。美は他のために尽そうとしなくても、世を美しくする。しかしその美しい夏の花も一度病気に罹って腐れば、最も下等な雑草よりも醜いものになってしまう。人間もその通りである。腐った百合の花は雑草よりも悪臭を放つものとなるように、最も美しい者もその行い如何で、もっとも鼻もちのならないものになると、Southampton に美貌にふさわしい美徳を持つように警告している。そしてこの場合には薔薇を用いていないことに留意する必要がある。

Sonnet 95 も Southampton に警告を与える詩である。彼の不面目な行為 (shame, l. 1), 罪 (thy sins, l. 4), 女遊び (thy sport, l. 6), 悪徳 (l. 9) などを a canker in the fragrant rose (l. 2) にたとえ、美しい薔薇の蕾がその芯に食入った虫を隠している様に、彼のような高貴な身分の人はその過ちを彼の高貴さが包み隠し、美化してはいるものの、(beauty's veil doth cover every blot / And all things turn to fair that eyes can see!, ll. 11-12), やはり君の美しく花開く名声をそこねる (Doth spot the beauty of thy budding name!, l. 13) ものだと述べている。

Sonnet 98 では春がきて、百花の香り高く爛漫と咲き誇る四月となり、万物若々しく元気に溢れ、鳥がなげども、Southampton から別れて遠く離れておれば、種々なるよき香りや色の花にも我が心浮き立たず、百合の白さも愛でず、薔薇の赤きも称えず、君こそこうした花の原型 (pattern) であって、百合も薔薇も君を真似て画いた喜びの画像に過ぎず、ただ綺麗に見えるだけのことである。それ故に春が来ても、君から別れ住めば、なお冬であって、花や鳥と遊ぶも君の影 (shadow, l. 14) と遊ぶと同じであったとうたっている。この詩では Southamptonこそは全ての美しいものの根元のモデルであって、あらゆる美しい花

も彼を真似て画いた影であるということになる。そしてそれを説明する詩として、

Sonnet 99では、春早く咲く堇はその香りを我が愛する Southampton の呼吸から盗み、花卉の誇らしい紫色は彼の静脈から染め取ったのであり、百合はその白さを彼の手から盗み、マヨラナ (majoram) の薔はその黄色を彼の金髪から盗んだのだ。薔薇 (roses) は戦のいて棘の上に不安げに立っており、その一つは赤面して恥らいを示し、他の一つは絶望で蒼白であり、第三番目のバラは赤でもなく白でもなく、その両方の色を彼の顔から盗み、それに彼の呼吸から盗んだ香りを更に加えたものであったが、その盗みをしたために、あのよう^{オノ}に誇らしく成長し、美しく花を咲かせようとしている最中に canker-worm が復讐としてすっかり食い尽してしまった。他にも色々の花を見るけれど、すべて君からその色や香りを盗まないものは一つも目につかなかった、と述べている。このソネットでは one blushing shame (l. 9) で表わしている薔薇は英国で最も古くから愛好されていた薔薇である maiden's blush というピンクの薔薇であり、another white despair (l. 9) は *Rosa alba* の一種であったと思われる。また A third, nor red nor white, had stol'n of both, / And to his robbery had annexed thy breath: (ll. 10-11) とある薔薇は白地に赤斑点や赤縞のある the York and Lancaster rose を云っているのだと Graham Stuart Thomas はその著 *The Old Shrub Roses*, p. 64) で指摘している。シェイクスピアは当時実際に栽培されていた薔薇を極めてよく観察しており、単に本や物語で知ったり、見物した薔薇でなく、彼自身実際に薔薇を栽培した経験があったのではないかと Thomas は述べている。

Sonnet 109では、For nothing this wide universe I call, / Save thou, my rose; in it thou art my all. (ll. 13-14). と Southampton を my rose と呼び、善にして美なる彼がなければ広い宇宙も無だといっている。Cleopatra が Antony を失った時の言葉、Which (=this dull world) in thy absence is / Nothing better than a sty (*Antl.* IV. xv. 61-62) や And there is nothing left remarkable / Beneath the visiting moon. (*Antl.* IV. xv. 67-68) と同じ趣意を表わしている。シェイクスピアにとって Southampton は、Cleopatra にとっての Antony と同じであって、愛の対象が my rose ということになる。

Sonnet 116では愛をうたい、愛こそこの詩を作らしむるものであると述べる。シェイクスピアの Southampton に対する愛がどのようなものであったかを極めて明瞭に述べている。真の愛は真心同志の結婚 (the marriage of true minds, l. 1 で the Prayer Book の the marriage-service の趣旨と同じ) であって、事情が変わるのを見てとると変ってしまうような愛 (love which alters when it alteration finds (ll. 2-3) ではなく、また相手の気が変わるとそれにつれて変るような愛 (Or bends with the remover to remove, l. 4) でもなく、暴風雨に当面しても決して揺れることのない不動の航海標識のかがり火であり (ll. 5-6)、高さは計り知り得るが、その価値は無限にして計り知れない、あらゆる航行する船への導きの北斗星である (ll. 7-8)。この愛はすべてを破滅し尽す時 (Time) のなぐさみたる道化ではない (l. 9)、たとえ薔薇色の唇や頬 (rosy lips and cheeks) が時の曲った鎌 (Time's bending sickle = Death's sickle) で刈り取られるとも (ll. 9-10)、愛は短い月日と共に変ることなく、未来永劫に続くものである (ll. 9-12)。このような愛によって彼は詩を作ったのだと述べている。そしてこの詩では美しい肉体を命の短い薔薇の色をもって表現している。

以上述べてきたようにシェイクスピアが Southampton についてうたったソネット1番から126番までの group には随所に薔薇が用いられており、特に1番から17番までの結婚によって美しさを子供に再生させるよう Southampton に訴えるソネットに多く使われている。しかし1番から126番までの中でも Southampton がシェイクスピアの情婦たる the dark lady を彼から奪ったことを述べた40番から42番までのソネット更に彼の競争相手の詩人 (Rowse によれば Marlowe) がパトロンたる Southampton の寵愛を得て、彼の立場が危くなったことを嘆く78番から86番までの中では薔薇は使われていない。

127番以下のシェイクスピアの情婦で、既婚の貴婦人であった the dark lady に向ってうたったソネットでは薔薇は用いられていない。もっともその用いられていない理由を述べているソネット130番は別である。その130番のソネットには、My mistress' eyes are nothing like the sun, / Coral is far more red than her lip's red; / If snow be white, why then her breasts are dun, / If hairs be wires, black wires grow on her head. / I have seen roses damasked, red and white, / But no such roses see I in her cheeks; / And in some perfumes is there more delight / Than in the breath that from my mistress reeks. / I love to hear her speak, yet well I know / That music hath a far more pleasing sound; / I grant I never saw a goddess go; / My mistress, when she walks, treads on the ground. / And yet, by heaven, I think my love as rare / As any she belied by false compare. とあり、ll. 5-6 において薔薇の如き美貌もなく、ll. 7-8 において薔薇の如き香りも全く無く、the dark lady を最高美であり、最高善の象徴である薔薇をもって譬えることのできない理由を述べている。彼女は稀れに見る麗わしい女ではあったが、只々 sexual love 或は lust の対象としての世俗的な女であったのである。さてちなみに頬の美しさを譬えている roses damasked, red and white (cf. Sonnet 116) とは何か。Schmidt や Onions によると damasked とは of the hue of a damask rose という意味である。roses damasked とは damask-rose の色をした種々な薔薇ということになる。然らば damask-rose の色とは (1) pale red colour or blush-red colour 即ち薄紅である。(2) a mixture of red and white or striped red and white 即ち赤と白の雑色か縞の色であって、シェイクスピアがしばしば人間の美貌を譬えているのはこの意味の場合である。Rowse はこの薔薇を damask-roses, mingled red and white としている。美人の頬を表わすのであるから白と赤との縞ではなく、白地に赤のボカシの入った混色でなければならない。しからば damask-roses でそのように咲いた当時の薔薇は何であったのか。Damask-roses と云われるものには種類が多く、元来は十字軍の結果 Damascus から欧州に持ち帰られ、それが各国にひろまったのだと伝える1551年の文献がある程古い薔薇の種類である。この種の薔薇は一般的に香りの高い淡紅色の薔薇である。さきに述べた The York and Lancaster rose もこの種の薔薇で、この詩ではシェイクスピアがこれを云っているのか、⁽⁷⁾ 或は 'Great Maiden's Blush' と誤って呼ばれた古い当時の damask-rose の一種である Celsiana を指しているのかも知れない。この薔薇は咲き始めは温い淡紅色で、やがて紅に変色する種類である。兎も角も上述の damask-roses のような白赤の混色の美しい薔薇を指しているのであって、the dark lady のような lust or sexual love の対象は薔薇にはふさわしくなかったのだと思われる。

以上みてきたように薔薇は象徴、心象、および隠喩として Southampton およびシェイク

スピアの彼に対する愛を表現するために用いられているが、その愛を此処で要約してみると次のようなことになる。

Southampton に対する愛は一種の Platonic love であって、heavenly love とも云うことができ、また agapé 的な愛ともみることができる。そしてこの愛は Southampton とシェイクスピアとの所謂同性愛 (homosexual love) では決してない。その愛の本体は金髪・白色・碧眼のこの美青年の善と美とにたいする精神の憧れであり、またシェイクスピアのパトロンとして彼の生活を支えてくれたこの人にたいする忠誠的な、恩義に報いる愛でもあり、また人生の年長者としてまた経験者としてこの年の若い人に対する一種の師弟愛でもあったのである。そしてこの様な愛の対象である Southampton をシェイクスピアは天使とりたい、また世の一切の美しきものをして美しくあらしめている美の本根である美の原型と見做している。また善美の理想であり、真と美との合体とも見ている。この最高の善美の永遠化をシェイクスピアは願うのである。それには結婚によって子孫を得て、それによってその善美を永遠に伝えることと、詩にうたいそれによって永遠化を計る二つの方法とがあるが、両者を併用することが最もよいとしている。この両方法は薔薇を蒸溜してそのよき香りを rose-water として残す方法と薔薇を接木して増殖し不滅にする方法と同じであるとしている。外貌 (appearance) の美しさは時 (time) の破壊力に支配され、やがて老いて果てるものであり、これは薔薇の花のように命短いものであるが、真実 (truth) は人間の本体 (substance) であって、詩はその本体を蒸溜して永遠化するものともしている。真実と美とが相伴うものが最高の価値であって、美のみにて真実のないものは、美しいがよい香りのない canker のようなもので、canker は薔薇にして薔薇でないとしている。以上のような内容の愛をシェイクスピアは薔薇によつて表明しているのである。

シェイクスピアの「ソネット集」は Southampton と the dark lady との二人に向けてうたったシェイクスピアの愛の詩である。そして Southampton は彼の heavenly love の対象として、the dark lady は彼の earthly love 否 hellish love の相手であって、前者は彼に喜び (comfort) を与え、後者は絶望 (despair) を与えるのである (cf. 144)。一般に現代では愛とか恋愛とかは性欲から発し、感覚的な欲望が昇華して聖き恋愛となると説かれ、普通恋愛は天上的要素と世俗的・動物的要素の混合と考えられているが、「ソネット集」においてはこれらの両要素がそれぞれ分離し、純化し、対立し、対照的に二つの極 (pole) に別れて、互に他を鮮明化して強烈な印象を与え合っているのである。

Southampton については既に述べた所であるので此処では省略することにし、the dark lady および彼女に対するシェイクスピアの愛について極めて簡単に sonnets の順序に従って述べてみることにする。彼女は Mary Fitton とか Anne Whately とか種々な臆説があるが、歴史上の人物としては不明である。しかし「ソネット集」に現われる人物としては極めて明瞭である。既婚の貴婦人であって、その容姿は Sonnet 130の解説で既に述べた通り、目は黒く、黒髪で、唇もあまり紅でなく、胸も焦げ茶色で、顔も美しい薔薇色ではなく、呼吸も悪臭を放ち、声も音楽的な美声でなく、歩く姿も女神のように優雅ではなかった (cf. 127)。それにもかかわらずシェイクスピアには不世出の女に映る女であった (cf. 127)。彼女は天上から地獄に落ちた Venus のように魅力があり、性欲の実行を唆り、人を天国から地獄へと導く女である (cf. 129)。誇り強く残酷であって素行の修まらない女であった (cf. 131)。それでもシェイクスピアの溺愛する心には最も美しく貴重な宝石の如く思えるの

である (131. ll. 3-4)。また喪服のような黒い瞳が、その浅黒い顔に似つかわしく美しいことは黎明の東の空の太陽以上であり、また夕暮を告げる西空にきらめく宵の明星以上であって、美こそは黒であって、黒い顔でないものはすべて醜であると誓わせる魅力を持った女であった (cf. 132)。そのためにシェイクスピアは勿論、彼の善美の理想的人物として愛した Southampton もその誘惑の完全な虜となって、情欲の深い彼女に苦しめられたのである (cf. 133, 134)。彼女は多情にして幾多の男たちと関係を結んでおるのを知りつつもシェイクスピアは自ら進んで関係を求めるのであった (cf. 135, 136, 137)。彼女は恋愛の手管 (false subtleties) にたけ、いかにも真実であり誠実であるらしく振舞い、虚偽の女であると知りつつも愛さざるを得なかったのである (cf. 138)。このような魅力には彼は抗し得ず (cf. 139)、しかもその愛の苦しみに悲鳴をあげている (cf. 139, 140)。

このような愛は一体何であるかとシェイクスピアは反省と観察を加えている。141 番に述べているように、この愛は五感を満足せしめるための愛でなく、また五知恵 (five wits: common wit, imagination, fantasy, estimation, memory) も制止することができない愛であって、自らが自らを制御できなくさせて、罪を犯し、罰の苦しみを嘗めさせ、なおこの疫病ともいべき愛を利得と考えさせるような愛である。It is my heart that loves what they (=the eyes) despise. (141. l. 3) とあるようにこの愛は heart⁽⁸⁾ の愛である。この愛は既婚の婦人に対するものであるから、sinful loving (142. l. 2) であり、彼女はこの愛は罪である (love is my sin) と云って彼を憎む (142)。それでいて彼女は他の男たちをも追いかけて愛する (cf. 142, 143)。この愛は彼の愚なる heart (141, l. 9) によるもので、自らは承知しておりながらも、愛せざるを得なかったのである (cf. 143)。要するにこの愛は 129 にある lust である。Southampton が the better angel であるならば、このような罪深き愛の相手である the dark lady は悪霊 (the worse spirit) であり (144. ll. 3-4)、また女性悪の権化 (my female evil) でもあり、bad angel でもあって、シェイクスピアを地獄に引き落とすと同時に Southampton をも誘惑・墮落させ、純潔の彼に醜悪な自惚高き彼女が求愛して天国より地獄に引き込み、天使である彼を変えて悪魔に (fiend) にしようとしたのである (144)。

しかしシェイクスピアはこのような愛からやがて醒め、魂 (soul) の永遠性を求めるに至り (146)、自らの愛を熱病の如し (as a fever, 147. l. 1) と認め、この病気を重くし、長びかせるものを食し、不快な病的な食欲を満たそうとしていたことに気づき、理性の命ずることを守らぬために理性を失い、また欲望は医術にさからうと死に至らしめることを今や悟るのである。理性を無視しておって、自らの治療ができず、絶えざる不安に気が狂い、全くの狂人と化し、思考も狂い、全く真実とかけ離れたことを口にして地獄の如く黒く、夜の如く暗い彼女を fair であると誓い、bright であると思っていたことに気付くのである (147)。彼は溺愛しておりながらも、彼の心が彼に告げるこの女の実体と、溺愛のためにこの女に対して懐いた幻想との差異を知り、自らの眼の狂っていたことを意識したのである (148-149)。そしてこの悪の花 (the sinister flower) とも云うべき the dark lady が欠点だらけでありながらも彼を支配するこの強い力を何処より得ているのかと自問する。それは彼女の無価値 (unworthiness) と愛の術より来ると知る。しかしなおも彼女に心を惹かれて、もし彼女の無価値が彼に愛を興したとするならば、彼は彼女に愛される資格あり (If thy unworthiness raised love in me, / More worthy I to be beloved of thee. 150, ll. 13-14) と云うが、

彼が尊き部分をいやしき肉体の叛逆者に裏切り売るものであり (I do betray/My nobler part to my gross body's treason. 151. ll. 5-6), また肉はみすばらしき苦役者たることに甘んじておる (He (=flesh) is contented the poor drudge to be. l. 11) と自覚し、やがて、And all my honest faith inthee is lost: (152, l. 8) と云い、事実こそむいて、彼女が深い親切、愛情、真実および貞節を持っていると偽って主張し、また暗黒な彼女を明かるく表明するために、盲目にも見える眼があるといったような偽った断言をしてきた自らが、真実にたいして醜悪な嘘を誓言した不正を切に感じ (152), ついにこの悪の華にたいする愛は終りを告げたのである。

この愛は一種の結びの詩とも見らる 153 および 154 に述べられている Cupid の愛、ここでは Cupid の語原通りの色欲 (desire) の愛であり、光明を装いながらも暗黒であり、様相と実体の乖離が甚だしく、真実と虚偽、喜びと絶望、愛情と憎しみ、快楽と苦悩、美しさと汚さ等の反対感情併存 (ambivalent) する現代的な愛であり、俗悪で悪魔的でありながら極めて強力であり、悲劇を惹起する力を持つ愛であった。そうして「ソネット集」ではこうした愛またその対象には薔薇は一度も用いられてはいないのである。

要するにシェイクスピアの「ソネット集」では、彼のパトロンであり、一種の教え子でもあり、彼には善美の理想とも、真と美との最高な価値のものとも思われ、また美の原型であるとも考えられた、美少年であった Southampton を詩にうたうため、象徴、心象、明喩および隠喩として薔薇が用いられ、また Southampton にたいするシェイクスピアの Platonic love を表明するためにも隠喩として用いられている。そしてただ薔薇の花の美しさのみでなく、その香り、rose-water (attar, otto), 薔薇の接木、薔薇の害虫、病気である canker, canker-bloom, thorns など用いられている。しかもシェイクスピアが用いている薔薇は彼が伝統的な文学より得たものだけではなく、野生の薔薇として実際に生えている薔薇および当時栽培された薔薇より得たものであって、当時としては彼はかなり広い、しかも正確な薔薇の知識を持っていたものと推定される。そしてそれらの薔薇をかなり realistic に用いているが、薔薇の芸術上の使用の伝統から云うならば、Eros に密着したギリシア的、またルネサンス的系統というよりはむしろ Hebrew 的、キリスト教的、中世的、Dante 的、morality play 的系譜に沿って、「ソネット集」では用いているのである。

注

- (1) N. P. Harvey says in his *The Rose in Britain*, "Until the late eighteenth century Roses were only summer flowering," at p. 3.
- (2) Seager の *Natural History in Shakespeare's Time* の p. 261 を参照。
- (3) Bertram Park *The World of Roses*, London, 1962 の Intro. p. 7 を参照。
- (4) Thomas は *The Old Shrub Roses* の29頁で、Gerard は当時の薔薇として14種をあげていると云っている。
- (5) ギリシアの昔では薔薇は *basileus ton antheon* すなわち the king of flowers であった。Anacreon は花の王と歌った。しかし 600 B. C. 頃に女流詩人 Sappho が花の女王と歌ったことから、キリスト教徒や回教徒の一部の人たちを除いては、薔薇は専ら女性とみなされ、愛の女神で

ある Venus と関連するようになったのである。しかしキリスト教では、特に中世期では薔薇はキリストおよび教会と密接な関係をもっていた。

- (6) この美少年を Pembroke 伯 (William Herbert), Henry Willobie, William Hughes などとする諸説がある。Wriothesley の発音が Rosely としたとして Rose とこの美少年が特に関係が深いとする Charlton Hinman の様な学者もいる。
- (7) The York and Lancaster Rose の色彩は the ground colour of the petals is white, irregularly and lightly marked or blotched with blush-pink or rose, the striping and blotching being only partial. と *The Old Shrub Roses* の64頁にある。
- (8) heart は単なる心臓とか愛情とかの意味でなく、エリザベス朝時代での heart の意味に解すべきであると思う。肉体と魂 (soul) との medium が spirit であり, spirit は a most subtle vapor which is expressed from the blood であり, また the instrument of the soul であって, 魂のあらゆる行動を行うものである。そしてこの spirit には natural, vital, and animal の三種の spirit がある。そしてそれらの spirit はそれぞれ the liver, the heart, and the brain の中において生じさせられるのであると Burton は説いている。その様な意味の心臓である。(Science and English Poetry の pp. 9-10参照)。それ故に heart は vital spirit を生じさせる所である。そしてまた heart は the seat of love and amorous desire とも見做されいた。

参 考 書

- Akrigg, G. P. V. *Shakespeare and the Earl of Southampton*, London, 1968.
- Bartlett, I. *A Complete Concordance of Shakespeare*, London, 1953.
- Bush, Douglas. *Science and English Poetry*, London, 1967.
- Gordon, Jean. *Pageant of Rose*, Vermont, 1961.
- Halliday, F. E. *A Shakespeare Companion*, London, 1952.
- Harvey, N. P. *The Rose in Britain*, London, 1958.
- Landry, H. *Interpretations in Shakespeare's Sonnets*, University of California Press, 1963.
- Leishman, J. B. *Themes and Variations in Shakespeare's Sonnets*, London, 1961.
- McFarland. *Modern Roses* 6, Pennsylvania, 1965.
- Rowse, A. L. *Shakespeare's Sonnets*, London, 1964.
- Rowse, A. L. *Shakespeare's Southampton*, London, 1965.
- Seager, H. W. *Natural History in Shakespeare's Time*, London, 1896.
- Thomas, G. S. *The Old Shrub Roses*, London, 1965.
- Winn, James. *The Master-Mistress*, London, 1968.
- Yoch, J. James. *Lust and Poetry in Shakespeare's Sonnets*, Michigan, 1966.
- 青木 正久 「薔薇物語」光和堂, 1965.
- 石川林四郎 「英文学に現はれたる花の研究」研究社, 昭和3年.
- 並 河 亮 「薔薇と人生」社会思想研究会出版部, 1962.
- 松村 義敏 「聖書の植物」富山房, 1953.
- 宮岡 常夫 「シェイクスピアのばら」, 阿南工専紀要, 1967.

Summary

Shakespeare's *Sonnets* and the Roses

Mutsuo NAKAMURA

Roses and their related words and imagery are very frequently used in Shakespeare's dramas and poems, especially in his *Sonnets*.

In his works Shakespeare used the rose in 6 meanings: (1) the flower *Rosa*, (2) ribbons worn in the ears or on the shoes, (3) the badges of the houses of Lancaster and York, (4) denotation of a florid complexion or red cheeks, (5) symbol of youth and beauty, (6) fond compellation, and (7) name of a house. In *Sonnets* the 1st, 4th, 5th and 6th meanings are mainly used.

As for the flower *Rosa*, there were only fourteen kinds of roses known in Shakespeare's time as shown in Gerard's *The Herball*. And they were not so beautiful as the present-day's roses are. But they were deemed to be the king or queen of flowers and were also regarded as a symbol of supreme beauty.

Shakespeare's 154 sonnets are divided into two main groups. The first group contains 1-126 sonnets which are addressed mainly to young Southampton (1-17: an appeal to him to marry and reproduce his beauty in a child; 40-42: his stealing of Shakespeare's mistress; 78-86: a rival poet's securing of his favour). The second group contains 127-152 sonnets which are addressed mainly to Shakespeare's mistress, the dark lady. Roses are mainly used in the first group of sonnets and not in the second group (except one sonnet 130). Roses are used in the following sonnets: 1, 2, 5, 6, 14, 15, 16, 17, 18, 19, (25), 35, 54, 65, 67, 68, 69, 70, 94, 95, 98, 99, 109, and 116. They are used 23 times: 8 times in 1-17 group, none in both the 40-42 group and the 78-86 group, and 15 times in the rest. But in the second group addressed to the dark lady the rose is used only once in 130, showing the reason why the rose cannot be used in this group.

In Shakespeare's *Sonnets* his love for Southampton and his love for the dark lady are depicted respectively in the first group and the second group. These two kinds of love are purified from each other into the two opposing poles, and the contrast between them intensifies and vivifies each other. The love for Southampton is Platonic love and heavenly love. He is represented as an angel, the pattern of beauty, and the ideal of good and beauty or truth and beauty. Shakespeare desires that Southampton will make himself eternal by means of begetting his children by marriage, and also that he will make Southampton eternal by his sonnets. This love is neither homosexual love nor the sublimation of sexual desires. It is the spiritual longing for the ideal of beauty and truth, and at the same time the desire for its eternization. The love for the dark lady, on the other hand, is

an earthly, hellish and sinful love. It is of lust and sexual desire, even though it is so powerful that it overwhelms him. The dark lady is represented as the worse spirit, a bad angel, and the female evil. Her unworthiness makes him dote on her as if he were beside himself with a fever.

In the *Sonnets* the roses are used as symbols, images, and metaphors to represent the Platonic love for Southampton and, not used for the dark lady and her love.

Presumably Shakespeare got his knowledge of roses not only from traditional literary works, but also from real wild roses and cultivated roses of his time. His roses are more in line with those which can be seen in Hebrew, Christian, Medieval and Dantean literatures and morality plays than those of Greek and Renaissance literatures which connect closely with Eros.